

孟 郊 の 交 友 論

薄 井 信 治

Mêng Chiao's view of friendship

Sinji USUI

一

孟郊（七五二―八一四）に交友論とでも言うべき一群の詩がある。「審交」（卷一）・「勸友」（卷二）・「求友」（卷三）・「結交」（卷三）・「択友」（卷三）がそれである。友情とは何か、友情とはどのようなものかということ詠んだものではなく、友人と交際するとはどういうことか、どのような人物と交際すべきかを述べたものである。あまり注目されることのない諸篇であるが、内容がいかに孟郊らしいものであり、孟郊の詩の発想や表現を検討していくのに十分役立つと思われる。

二

審交

交はりを審かにす

- 1 種樹須擇地 樹を種うるは須らく地を択ぶべし
- 2 惡土變木根 惡土は木根を變ず
- 3 結交若失人 交はりを結んで若し人を失へば
- 4 中道生謗言 中道にて謗言を生ず
- 5 君子芳桂性 君子は芳桂の性
- 6 春榮冬更繁 春榮え 冬更に繁る
- 7 小人槿花心 小人は槿花の心

- 8 朝在夕不存 朝在るも 夕べは存せず
- 9 莫躡冬冰堅 躡む莫かれ 冬氷の堅きを
- 10 中有潛浪翻 中に潛浪の翻る有り
- 11 唯當金石交 唯だ金石の交はりに当たつては
- 12 可以賢達論 賢達の論を以てすべし

樹を植えるのは土地を選んでしなければならぬ。悪い土地は木の根をだめにする。交際をして、もし人が自分から離れていけば、途中で悪口を言われる。君子の性は匂いのよい桂のようであり、春さかんになり、冬ますます生い繁る。小人の心は槿の花のようであり、朝咲いて夕方にはしぼんでなくなっている。冬の氷が堅いからといって踏んではならない。中では潜んだ波が翻っているのだ。金石のような変わらぬ交際をするには、その人が賢達の人かどうかを論ずればよいだろう。

1・2句は〈興〉表現となっていて、3・4句を導き出している。〈興〉表現は中国古典詩に特有の修辞法である。大まかな条件をあげれば、「(1)一首（または各章）の冒頭部にある。(2)一語でなく二句程度の隠喩のまとまりである。(3)隠喩の連続（諷喩）は冒頭部に限られ、全篇に及ばない。(4)隠喩には身の周りの自然物が用いられる」ということになる。本詩の1・2句はこの条件に適っている。孟郊の詩には〈興〉表現やそれに近いものが多く見られる。本稿で取り扱う「勸友」「求友」「結交」の冒頭部も〈興〉表現に近く、孟郊自身は〈興〉表

現そのものと認識していたかもしれない。また、孟郊の「興」表現は一種の道理を導き出すことが多く、その道理の権理づけのために「興」表現を用いているふしがある。本詩でも「人を選んで友人づきあいをしなければならぬ」という主張になっている。

3・4句には孟郊の人間不信が感じられる。「中道生謗言」と類似の表現には、「求友若非良、非良中道交」（卷三 求友）がある。「謗言」に注目すれば、「面結口頭交、肚裏生荆棘」（卷三 扞友）がある。「荆棘」はイバラに棘の多いことから讒賊や讒言の比喩に用いられる。

孟郊には「君子勿鬱鬱士有誇毀者作詩以贈之」（卷三）のように題からしても讒人をテーマにした詩もあり、「讒人畏賢明」（卷六 古意贈梁肅補闕）、「讒人峽虬心」（卷十 峽哀十首其六）のように言及するものもある。人間不信は孟郊の人間観だけでなく、交遊関係では讒言する者を警戒せねばならない状況にあったと思われる。

5・6句と7・8句では「君子」と「小人」の対比がなされている。当然のことながら、孟郊は「君子」を理想の友人と考え、「小人」をそれに対立する人物だとしている。それは君子は常に変わらぬ存在であり、小人はすぐに変節してしまうからである。「孟東野詩集」の詩には、「君子」が44例、「小人」が10例見える。「君子」は贈詩の相手を指すことが多く、本詩のような抽象的な「理想の人物像」を表すものは少ない。次の例は「交」とともに「君子」の現れるものだが、やはり「君子」は贈詩の相手を指している。

11 始知君子心 始めて知る 君子の心
12 交久道益彰 交久しくして道益々彰かなり

（卷六 贈崔純亮）

9・10句とよく似た発想に「北風臨大海、堅氷臨河面。下有大波瀾、对之無由見」（卷三 求友）がある。表面上は堅いが、内側は違う、というのは「面結口頭交、肚裏生荆棘」（卷三 扞友）に通ずる。交際の危うさと人間不信を表すものである。

12句「可以賢達論」は1・2句の「興」表現と対応する。すなわち本詩は、人が良い人物かどうかを吟味してから交際せよ、ということ述べている。

三

勸友 友を勧む

- | | |
|---------|-------------------------------|
| 1 至白涅不緇 | 至白は涅すれども緇 <small>ま</small> まず |
| 2 至交淡不疑 | 至交は淡けれども疑はず |
| 3 人生静躁殊 | 人生 静躁殊なる |
| 4 莫厭相箴規 | 相箴規するを厭ふ莫かれ |
| 5 膠漆武可接 | 膠漆 武接 <small>あ</small> ぐべく |
| 6 金蘭文可思 | 金蘭 文思ふべし |
| 7 嗒嗒無心人 | 嗒くに堪へたり 無心の人の |
| 8 不如松柏枝 | 松柏の枝に如かざるを |

この上ない白は黒く染めようとしても黒くならない。はなはだ親密な交際は淡いのだが疑いの心がない。人生、静かなことと騒がしいことはことなるのだから、戒めただすことをいやがってはならない。膠と漆のような堅い友情の跡をつぎなさい。金蘭の美しい文采のような友情を思いなさい。ああ、悲しいことだ、無心の人でさえ、松柏の枝には及ばないとは。

1・2句は「興」表現に近い。注意すべきは「至」「不」の二字が二句の同位置に繰り返されていることである。孟郊にはこのような反復的表現によって始まる詩が多い。孟郊の詩五百余首の五分の一以上の116例が詩の冒頭で反復的表現を用いている。反復的表現と「興」的表現の組み合わせも多い。

5・6句には「審交」（卷二）の「金石交」と同じ意味の常套語「膠漆」「金蘭」が使われている。8句の「松柏」も孟郊の常用語の一つである。「松柏死不變、千年色青青」（卷七 答郭郎中）とあるように松や柏の常に変わらぬさまに価値があるとしている。「松」は特に多用され、常に変わらぬことから「青」や「青青」と結びつけて用いられる。これらはまだ比喩の実体がある場合が多いが、常に変わらぬことから貞節を保つ象徴となり、「貞松」や「直松」という語になると、もう具体的な植物としての松は感じられない。

交友論に関係する松には次の例がある。

- 5 砥行碧山石 砥ぎ行く 碧山の石
- 6 結交青松枝 交はりを結ぶ 青松の枝

(巻七 答友人)

続く二句「碧山無転易、青松難傾移」から分かるように「碧山」「青松」は変わったり、移ったりしないものとして取り上げられている。

- 1 近世交道衰 近世 交道衰へ
- 2 青松落顔色 青松 顔色落つ

(巻二 袁松)

青松が枯れる原因を「交道衰」ととらえるところに孟郊らしきがある。詩心は現実の枯れそうな松から動いたものだが、詩句の中では象徴としての松にすりかわっている。

本詩は、「膠漆」や「金蘭」のごとき「至交」を求めなければならないが、得た友人の心変わりすること松柏の枝に及ばない、ということ述べている。

四

求友 友を求む

- 1 北風臨大海 北風 大海に臨み
- 2 堅冰臨河面 堅冰 河面に臨む
- 3 下有大波瀾 下に大波瀾有れども
- 4 對之無由見 之に對するに見る由無し
- 5 求友須在良 友を求むるは須らく良に在るべし
- 6 得良終相善 良を得れば終に相善し
- 7 求友若非良 友を求めて若し良に非ざれば
- 8 非良中道變 非良 中道にて變ず
- 9 欲知求友心 友を求むるの心知らんと欲せば
- 10 先把黄金鍊 先づ黄金を把つて鍊ぜよ

北風は大海原に臨み、堅い氷は河面に臨む。その下に大きな波があるが、それを見るよすがはない。友人を求めぬなら良い人物でなければならぬ。良い人物が得られれば、死ぬまで仲よくできる。友人を求めて、もしも良い人物でなかったら、その良くない人物はきつと途中で心変わりするだろう。友人を求める心を知ろうとすれば、まず黄金を精鍊してみるのだ。

1-4句は〈興〉表現に近いものである。すでに述べたように「審交」(巻二)の「莫躡冬氷堅、中有潜浪翻」と類似した発想の表現である。「臨」が反復的表現になっていて、〈興〉的表現との組み合わせになっている。

5-8句も、友人として良い人物を求めなければ、いつか裏切られるというこで、「審交」の内容によく似ている。「求友」が2回、「良」が4回、うち「非良」が2回繰り返されている。

9・10句は陳延傑の注に「金を鍊つて人の心の良と否とを知るべきを言ふ」とある。「審交」の末二句「唯当金石交、可以賢達論」に対応すると考えられる。

本詩も、交際する人物が良いか悪いかを試してから交際せよということ述べている。

五

結交 交はりを結ぶ

- 1 鑄鏡須青銅 鏡を鑄るには青銅を須ふ
- 2 青銅易磨拭 青銅は磨拭し易し
- 3 結交遠小人 交はりを結ぶには小人を遠ざく
- 4 小人難姑息 小人は姑息し難し
- 5 鑄鏡圖鑑微 鏡を鑄るは微を鑑するを図る
- 6 結交圖相依 交はりを結ぶは相依るを図る
- 7 凡銅不可照 凡銅 照らすべからず
- 8 小人多是非 小人 是非多し

鏡を鑄造するには青銅を必要とする。青銅は磨きあげやすいからである。人

と交際するには小人を遠ざけることである。小人は付きまといて逃れることが難しいからである。鏡を鑄造するのは、微かなことをあきらかにしようとするからである。人と交際するのは、その人にたよろうとするからである。平凡な銅は鏡にしたところで照らすことができない。小人は是非の心が多い。

「鑄鏡」と「青銅」、「結交」と「小人」が、尻取り式のいわゆる蟬聯体を含む反復的表現を多用しながら述べられる。また、1・2句と3・4句は〈興〉表現に近い対応を示し、「鑄鏡」が「結交」のアナロジーとなっている。

3句「結交遠小人」では、「審交」（卷二）よりも積極的に「小人」を排斥している。

6句「結交凶相依」から、根本的な孟郊の交友観が分かる。人と交際するのは、その人にたよろうとするからである。だからこそ、たよりがいのある人物を選んで交際しなければならない。そのためには「小人」を徹底的に排斥しなければならない、というのが本詩の述べるところである。

ここで、誤ってはならないのは、友人に政治的経済的な援助を期待するという考えが唐代では通念として存在しており、孟郊独自のものではないということである。だから、孟郊が交友における「利」を否定することも矛盾しない。友人に助けを求めようとするのは、当時は決して「利」を求めることではなかったのである。

六

擇友

友を択ぶ

- 1 獸中有人性 獸中に人性有り
- 2 形異遭人隔 形異なり 人の隔つるに遭ふ
- 3 人中有獸心 人中に獸心有り
- 4 幾人能真識 幾人能く真に識る
- 5 古人形似獸 古人 形 獸に似るも
- 6 皆有大聖德 皆 大いなる聖徳有り
- 7 今人表似人 今人 表は人に似るも
- 8 獸心安可測 獸心 安んぞ測るべけん

- 9 雖笑未必和 笑ふと雖も未だ必ずしも和せず
- 10 雖哭未必戚 哭すと雖も未だ必ずしも戚ならず
- 11 面結口頭交 面は口頭の交はりを結ぶ
- 12 肚裏生荆棘 肚の裏は荆棘を生ず
- 13 好人常直道 好き人は常に直道し
- 14 不順世間逆 世間の逆に順はず
- 15 惡人巧諂多 悪しき人は巧諂多く
- 16 非義苟且得 非義にして苟且に得る
- 17 若是傲真人 是くの若く真人に傲へば
- 18 堅心如鐵石 堅き心は鉄石の如し
- 19 不諂亦不欺 諂はず亦欺かず
- 20 不奢復不瀟 奢らず復た瀟れず
- 21 面無慙色容 面 色容を慙しむ無く
- 22 心無詐憂傷 心 憂傷を詐る無し
- 23 君子大道人 君子は大道の人
- 24 朝夕恒的的 朝夕 恒的的たり

獸の中に人間性があるが、人と姿形がちがうので人に分け隔てられる。人の中に獸の心があるが、はたして何人がそのことを真に識っているか。古人は姿は獸に似ていたが、皆大きな聖徳があつた。今人は表面は人に似ているが、獸の心があることをどうして測り知ることができよう。彼らは笑つてはいても必ずしも和やかではなく、声をあげて泣いていても必ずしも悲しんではいない。表面では口先ばかりの交際をし、肚のうちにはイバラのような悪口を生じている。良い人物は常にまっすぐものを言い、世間の人々の行う邪な道に従いはしない。悪い人物は巧みな諂いが多く、正義にそむき、ごまかしてものを得る。このように真人にならば、堅い心は鉄石のようになる。諂わず、また欺かず、奢らず、瀟れない心である。表面に関しては容色を惜しんだりせず、心に関しては憂えおそれる気持ちを詐ったりはしない。君子はそのような大道の人であり、朝夕いつも明らかな存在である。

本詩は、友人を選ぶ際の注意事項が並べてある。これまで取り上げてきた詩では、良い人物を友人として選ばなければならない、と主張しているが、ここでは

どのようなところに注意すべきかを、述べている。一首全体に反復的表現を用いている。

1-8句は「獸」と「人」を対比させながら繰り返している。「人性」を肯定し、「獸心」を否定しているが、1-4句は5句「古人形似獸」を導くもので、[△]興的な表現となっている。

孟郊においては「古」は一二の例外を除いて、すべて高く評価されるものである。しかし、その実体は詩句の中からはつかめない。むやみな憧れのようにも受け取れる。結局、「今」を強く否定するために用いられると考えるのが良いだろう。本詩でも「古人」は「今人」と対比的に扱われ、「今人」を攻撃している。このような例としては次のものがある。

- 5 古人結交而重義 古人交はりを結んで義を重んじ
- 6 今人結交而重利 今人交はりを結んで利を重んず

(卷二 傷時)

- 7 今交非古交 今の交はりは古への交はりに非ず

- 8 貧語聞皆輕 貧語 聞きて皆輕し

(卷三 秋夕貧居述懷)

どちらも「今」の「交」を批判するために「古」が打ち出されている。

9-12句は「今人」の表面上に現れたものと、内側のものは違うということを言う。すでに「審交」(卷二)で取り上げたとおりである。大きくまとめれば、初句から12句までは、そのようなことを述べているのである。

「今人」にも「好人」と「悪人」がいる。批判されているのは、もちろん「悪人」の方である。15・16句は11・12句と対応している。

17句からは鉄石のような堅い心を持った人、すなわち友人として選ぶべき「君子」はどのような人物であるかを描写している。このような条件に合う人物であれば、友人としてたよることができるというわけである。19・20句では五言句の第三字を中心として対称的に同字を繰り返すという孟郊に特徴的な反復的表現が用いられている。21・22句「面無愴色容、心無詐憂傷」は友人とすべき理想的な人物のようすが、これは11・12句「面結口頭交、肚裏生荊棘」という非難すべき人物のようすに対応している。

七

五篇の詩を見てきたのだが、孟郊の主張することはたったの一つしかない。「良人物を選んで交際せよ。さもなくば、いつか裏切られる」ということである。つまり孟郊の「交友論」は交際におけるマイナス面のみを見て、注意を促しているだけである。「好人」「君子」が心変わりしない、と説くのもマイナス面の否定をしているのである。概して孟郊にはものごとのマイナス面を見ようとする傾向がある。『孟東野詩集』を繙けば随所にそのような詩句が見られる。本稿で取り上げた詩でも、交友の持つプラス面、心のつながりをもととする豊かな友情などに言及することがない。どの詩にも似たような発想と表現が出てくるものもあたりまえのことである。プラス面であれば、さまざまな角度から詠むことも出来ようが、マイナス面は多面的に描く必要がないからである。

このような交友観を持ち、詩として発表する人物が、傍にいる人々にはどのように見えただろうか。とりわけ友人として付き合い合っていた人は、自分をも常に疑いのまなざしを見詰めているように思えたのではないか。孟郊と最も親密であった韓愈は清濁併せ呑むタイプの人物であり、自己の俗物性にも自覚があったから、年長の孟郊の愚直さを愛したのだろうか、時折閉口したようすも見うけられる。韓愈の「長安交遊者。贈孟郊^③」という詩は、孟郊の交友観の過激さをたしなめるといふ内容のものである。

長安交遊者。贈孟郊 長安交遊の者 孟郊に贈る

長安交遊者	長安交遊の者
貧富各有徒	貧富 各々徒有り
親朋相過時	親朋 相過ぐるの時
亦各有以娛	亦た各々以て娛しむ有り
陋室有文史	陋室に文史有り
高門有笙箏	高門に笙箏有り
何能辨榮悴	何ぞ能く榮悴を弁ぜん
且欲分賢愚	且つ賢愚を分たんと欲す

「貧」は必ず「賢」であり、「富」は必ず「愚」であるとする孟郊の図式的で頑なな攻撃に対して、おそらく韓愈のような反応が一般的であっただろう。

孟郊の交友論に関しても、「君子」と「小人」は一人の間の中で混じりあっているものであり、そうはつきりと分けられないと感じて、全面的に賛同する者はいなかったに違いない。しかし、『孟東野詩集』の「哀傷」の詩篇や友人たちの孟郊を悼む詩には儀礼的なもの以上の真情を感じるのにはなぜか。豊かな友情を交わしながら、なぜ、孟郊はそれらを捨て去ったような交友論を述べるのか。結局は理論と実際の違いということなのだろうが、もう少し孟郊の交友関係を調べ、贈答詩を読み込んでから結論を出してみようと考えている。

(注)

底本には、華忱之校訂『孟東野詩集』（人民文学出版社）を使用し、野口一雄編『孟郊詩索引』（東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター）を参考にした。

① 薄井信治「〈興〉表現について」宇部工業高等専門学校研究報告第36号

② 陳延傑撰『孟東野詩注』（新文豊出版公司）巻二に「言鍊金可知人心良與否。『拾遺記』。方丈山有池泥。色若金。百鍊可為金。色青。照鬼魅。猶石鏡。不得藏形也。」とある。

③ 『昌黎先生集』（台湾中華書局）巻一。

（平成三年九月二十五日受理）

（宇部工業高等専門学校国語教室）